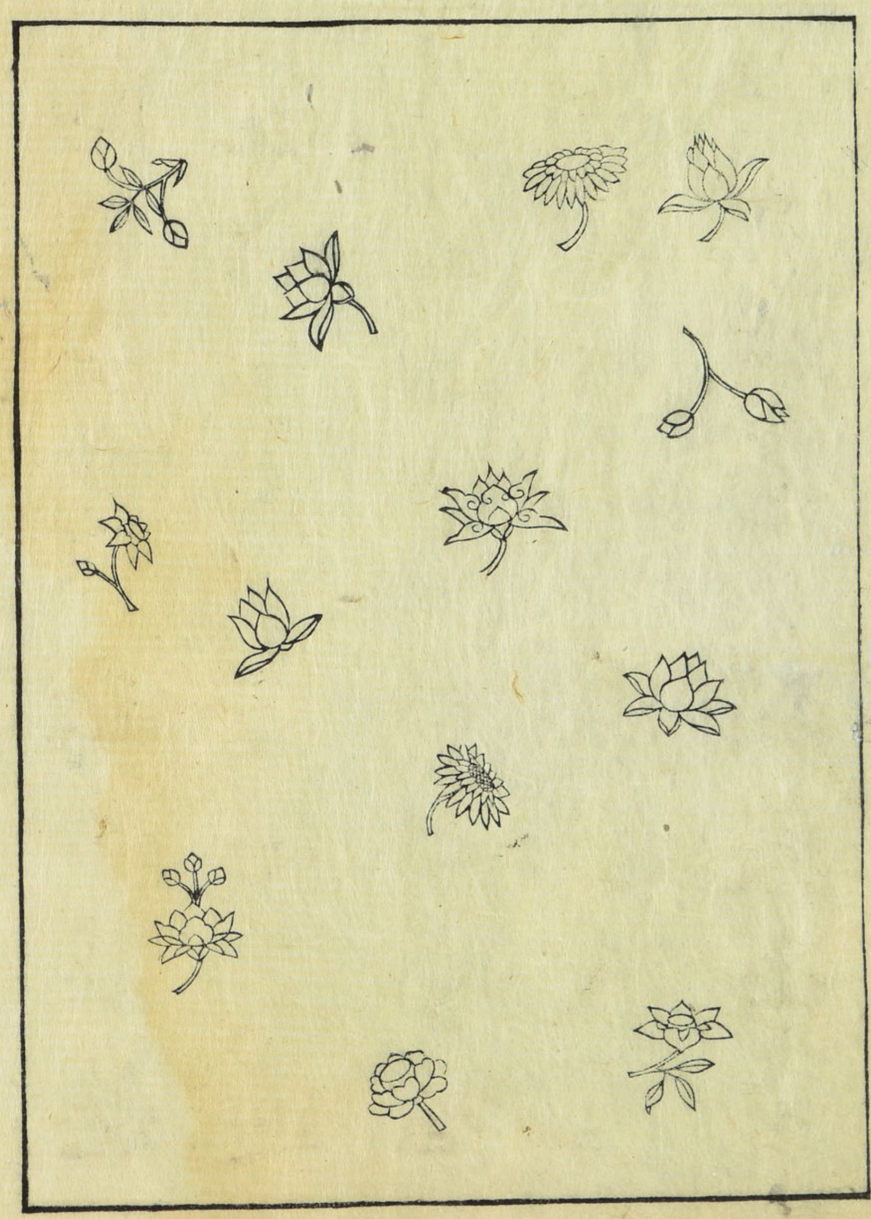
# 近世見聞南紀注生傳

一

圓光大師遺訓一枚起請文

そもそも一切の仏法の智者達の御法を申しを
既に念仏念ずもあるべし又学問をして心の心をさとり
て中に念仏ありそれあるべき唯往生極楽のためにて
南無阿弥陀仏申して報ぜん為往生をとげんと
ひとすじに申外ほかに別の子細候はず三心四修とて
中ごろの僧は皆決定して南無阿弥陀仏にて往生
をとげんと思ひ給へ候はんは外に行くべきこと
なり我は二尊の慈悲にすがりまいらせ本願にたのみ
奉り一向専念に信じ入れば一代の法を能く学

たとへ一文不知の愚鈍の身となりて尼入道の輩
智の業は問はずして智者にも愚者にもひとしなべて
唯一向に念仏せよとの事
為證以両手印
浄土宗の安心起行は一紙に尽極り源空が
所存は外に全く別義なしと存じて滅後の邪義
をふせぐものなり再三再四誡めをなす
建暦二年正月廿三日　源空
享和二年六月廿四日　正三位藤原實秋謹書



胸襟大義
究諸宗義
唐土善導
吉隱吉水
以一枚卷
開衆生蒙

得西邁者如是兩漾
嗟大勢至 翰上日紅
天親論往生謹題
常丑 根定山拜寫

南紀往生傳序

予嘗讀歷朝僧史。往生之跡
班々見焉。若其別記往生。支
那則有文諗瑞應刪傳。戒珠
往生傳等。吾邦則有慶保胤
往生傳。江匡房續往生傳等。

亦不下數十部。噫何其盛也。古人有云。末法万年餘教悉滅。彌陀一教利物偏增。豈不信而有徵乎。廼者專念寺主隆圓惠命。齎其所著南紀往生傳來請予序。取而讀之。蓋皆淨業之尤淳。而出於見聞之審者。此可以媿美於先賢。而取信於後世爲矣。予既深嘉惠命是舉。且謂傳中所載緇素。並是吾他日寶地携手之友也。則誼有不可得辭者。

故弁數言於簡首以還之

享和改元年七月佛歓喜日

吉水正統住知恩院

大僧正仰譽聖道撰

帝室圖書寮藏



[illegible]れ恒沙法　佛乃大慈悲きいまりるく。
衆生代迷倒とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
法義善巧の業ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]。五劫思惟
乃功力をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]。
誠[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]。十劫正覚乃燒
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]。十劫
又遥の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
く。こゝ念々ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]見佛必相の[illegible]ゝ[illegible]

ふかくなり。まことに名号乃至十声の
万善の功徳を備へ。恒沙
の功徳を備へ。まことに摂法
乃至数も。刹那より証入。諸仏の極
こゝろん。かゝる不思議の作法。吉水大師乃
ちまことにこゝろしり。選擇本願
の道あきらかにしり。その義を
伝して念仏はもとも人ぶくこゝろあく

きこゆれども。ゆゑはたゞふかく
ゆくゝ近くゆくゝはしれる人
多ありけれども。こゝろにたゞしきにあたるまれ
なり。いかなるこゝろにこれをと
なりもるを。こゝはもと新てひそか
に出のゝ人行の業所をあつめうち
南紀乃秘い。蓮友雪洲。後隆。二師の
紀の略ありて。こゝろ新く見聞

ずることを叶しがたし。ゆゑに寄られがたし。さるをわれ此乃指南をはじめて。ひとりの出家の身にあらずして。佛祖の恩澤にあらずしてはいかでか関のまさきぬけがたきを。易往浄土の門もひらけ。四乃海波羅蜜の名れい。娑婆世界の衆生にあまねくうるおさんに念佛乃功をはげまし。往生の素懐を遂ることをえんこそ。ゆゑなれ。重ねていまこれを



一華をもてあまたの四生をうるおし。四恩をもて告げがたきを佛祖の慈恵を謝せ。一端をもさしのべ法化乃資そもそもなりぬんとて。ものしいさをもて。まづ南紀の往を往ふちりをもんとなん。予深く信をおこしこうはまちをおわれ。注文刪補し。南紀往生傳と名つけて。剞劂氏にはつく。こゝ願くは毋法海

乃行者。の良論よりもまさ。やうてうれよひ
とし。のんをおすひ。やし記ぎてきひと嘆うこと
なり。ふ明れ積の緩これり。はその先達と遥
かへうとう。時は寿れ沙えの長み月半のに。
華頂山中保胤沙門法名
うれときし作る



## 題言 七條

○此書見聞ふ。漢ひしうん。文の体一やうならず。ゑ
ゑふるどもまでも。中ごりてんうんと給とく。
つづくと筆に任せつれど。稚れるく。假名の違う
ひ。まわりつひるけとばこ一ぢく又この書とよ
ゑ。これうた説法の因縁なりうで。へうんい志しよ
たぐり。傳よまれ作うれ。よく渡浮て深信金ひし。
きぐひくいきる生でんことるべうく。うて自利
真實なる人の。利他もまに実ふる法まちまるうなん
ひ。ひく供慶まるとうふり
○此書術素の部。別ちく。年深ど。年月れるぢまも
のうくど。ちよこれと不倫うう。漾うくもりなん

こうわぐも。今の出雲国の念仏。廣く十方氣して
郡で。術を男女。きつねの奇異の別なるを奉げく。
いくんやうの蓮華海舎は。同一念仏奇別題の見
第をもて。幸ふ。その法意ともうくん。ともに同ぬる人。
須菩提まれ華あるんみ。仏をうん
○ちぐくは生傳い。往生集。寄飯傳のごく。此未れ事れ
のこをうてうをうとうく人あわど。今い年生の行履
はぐはるるん。をくこれくぐーーのわく。国よ之のび
ぐくこのこをくぐ。ぐ差てるくもあるん寄んべー
○傳の中傳よ。人のうとぐべく。えんをつべをとうろ
をぐあるい。おくえまとうけてこれを作れ
○三巻くも。はぐの一伝くの紀州くをー。その外い諸



此名のをとしるれ
○傳中。德本行者は紀州日高郡。志賀村の人
をり。幼稚よりくよ念仏を。壮年よりびで。山林
抖擻。木食。但し衣。常住不叩ふて。常稽屈。
一向専修。名仏味の人をり。日高郡より
村。英京村。浦士郡塩津。市田郡須ケ谷村
をぐ。その居をぐあるくまわど。常稽念仏
不退門国をり。當時い摸州住尾寺に幽居を。
いくをろ化導にをぐくものをも多し。をうれ
ぐも此人い別格と私の約無くて。氣人乃
種準をくをぐ。濁流祥師のをく。はを
浄土の法門い。国光大師のごく此行をくをろと。

まことふたりなべし

○元亨辛酉の秋。此書の稿本を。華頂山仰蓋大僧正の法流ふべる。遠喜のあるより高頌居士を命じて一校せしめ序文を製せしむ。大僧正俗姓藤原氏。法名尊円。号常迂迷。今更号悟迷。生死事大。去常迅速。遷化しぬ。生死事大。去常迅速。今更号悟迷。

ちちふたりなべし。ちちふたりなべし。更に了祐の伝を加へ

と本しる。

如大僧正の一内証の書中に

擬しるるものなり

寿和二年秋八月これをとしくるる

南紀念佛往生傳卷之一目誌

本傳二十人附傳五人 合二十五人


梅寒上人 顯誉上人 七丁
蓮心法師 某氏女 十三丁
妙秋禪尼 十九丁
祐玄信士 廿一丁
事頓禪門 廿三丁
宗夢信士 廿四丁
妙壽禪尼 廿六丁
榮俊禪尼 廿九丁
淨慶禪門 三十丁
智品禪尼 三十二丁
栖蓮法尼 其弟 清圓尼 三十九丁
但信法子 五十四丁
辨榮童子 五十三丁
淨念禪門 五十五丁

妙天信女　五十八丁
妙鮮法尼　六十三丁
道意信士　六十七丁
松貞法尼　六十二丁
好倫法尼　其兄　六十五丁
妙薫信女　六十八丁

目誌畢



# 近世南紀念佛往生傳卷之一

## 梅寒上人　顯譽上人

師諱は梅寒。字は即心。別號理融。ぐぐう守愚と稱す。紀州和歌山の人なり。父は相田何某。其先。加州金澤ふるしが。もとあるく。當國に召さと漢の久保町に住せり。母は伊川氏なり。母あるに西岸寺は。鎮守八幡宮とぐぐう。何となく心肝に徹しく。尊く覚えぐ。ちちもち白衣の神人ありぐぐ。一顆の玉とらづけうぐぐ。ぐぐ。お

しつてたのもうさるれば。それ人うたがひとぶらうたぶるのこう。ちづうしるるなりられども。そもそも茫然として家に帰て。夫に此ことを申ふ夫ことごとく。汝ぞ身ふ何ぞ幸あるべとそれしが。ほどなく妊娠しぬ。遂に萬治三子歳十月五日。母ふやむことなくして男子を生ぬ。父母いうしきことぶて。八幡宮のまづけるる人子なれば。塵俗をいとむべらべて。三歳の時。西岸寺ふつれてり。それ入胎の瑞とりて。輪譽上人揺鞭し名く當寺第二世の主なり に投ど。上人やげちとと誠る

に。俊利るるて。庸児ふ異なりれば。大にしてこびもふつち剃度しぬ。梅寒し名く。それ意梅い諸木の兄にて。春とまづ寒とこのごと。花ひき清香を發れば。此児の器量ふなぞらへて。愛しつぶとり。つて親しく。経釋を指授せふそれ性ちく。一と聞て十と知るの才あり。

ちうに師十二の歳。輪譽上人示寂し給ひ。法弟顯譽上人名は祐善補處なりれども。そのもつ本師にしたがうことあるれば。先師になりうして教育せ

られぬ。光陰くうう。師年十六歳。東武増上寺に會下。祐察和尚の室ふう。螢雪のまぐれ前みち。ふく一宗の祕願とぐ。鑽仰の床れ。性相の幽致とも。法鼓やたけ。宗戒両脈を稟承を澄蓮社湛誉号そ。ち。岩月浄国寺の上首。聞證和尚ふ隨侍し。繩錐寢食と廢し怠ぬ。ぬう。ふ三年ぬて。義解大ふ發し。同学のふ講筵とふ。人れ聰敏と歎ぜ。ぬ。師年二十八。顕譽上人重く病ぬ。

ふ帰省し。看侍力とつくれども。日にくの。ぬくなくぬれば。上人づく起べうざると知て。師と臨末の知識ぬ。專修念佛し。終に正念明了ふ。遷化ぬる。時貞享四卯歳四月二十五日なり。さまだ此上人い日課念佛六萬遍の行者なるぞ。師と知識ぬて。目出度往生の素懐と遂られぬ。師資淺ぬ芳契ぞう。

かて檀越相議して。師を補處と弟とけられぬも。師ぬ隱遁の志しふ。世縁をふ思ひ

切なりければ。ひそかにのがれいでゝ。洛西泉谷にゆく。檀越等蹟をもとめて。尋ねしるべをたゞね。袖をかたしきて。懇に請じたてまつる。本國にかへり。情をまげて住せる。當寺の堂舍破壞しゝかば。師大に力をとゞけ。方九間二層の佛閣を造立し。遷佛供養のこゝろふ。四十八夜の別行を修し。本願念佛を弘通せられる。ゆへに教化ふかく。宗風ふ偏し。專修念佛をもつて靡然として草のなびくがごとし。ゆへに圓覺。起信。倶舍。唯識等の。大小權實の經



論を講じ。ゆへに。倦ことなく。智辨懸河のごとくなり。教人禪者帰伏せざるなし。その弘法の志しかくのごとし。同学義山上人も深く稱歎しまひしとなん。

師ある時。河内楠葉の宗覺律師に謁し。律部の不審を尋られしに。律師その卓見を感じ。律の精要をつくせり。秘書多く出しゆづる。又ある時。師法華経を講じたまふ。精義神ふり。妙理言外ふかし。靈山一會。儼然未散のおもかげとなり

と。それ會につらなりし人。皆感歎しなんなん。在
住すること廿一年。興法利生おもむくことこれなり。
これその素志にあらざるべし。ねがはくは獨處閑居して一
向に念佛せんとぞ。それなるべし。遂に師年四十九。
寶永五年のころ。寺職をとどめて。洛東華頂の麓に
幽居して。晨夕には大師の尊影前ふかくして慈恩を
感謝し。夕べには閑窓ふ座して至心に念佛をぞ。
くり舊懷を遂めつつ大ふまつりごとなりぬ
國君の嚴命下りて。大智寺に住せんことを請せらる。



師固辭すれども。ついにかなはず。住持せり。そもそも
當寺は一國宗門の錄所なり　朝廷紫服を賜ひ
國君寺領をこぞと寄せるが。衣食ともふ豐饒なりとぞ
ぞ。師その節儉とまれとぞ。清貧なるもの
ぞ。また時々飄然として。四遠に翺翔して。攝心念
佛をぞ。その高尚の氣韻ぞ知るべし。享保元申
歳の夏
有章院殿薨去ありぬ。師献經のことふ東武
に下向ぞ。帰路六月廿三日病と発れぬ。その惱ま

甚しいかな。心を勇猛にして。法衣をかけ。ひたすらに念佛を。漸く日を経て。七月六日帰寺のち病まんとす。ずうずうしく起べからざるを知て。至心念佛すること平生に過しより。十九日道俗數輩をあつめ念佛して臨終正念を祈求す。その夜弟子ども。彌陀経を誦す。高聲念佛すること數百遍。九日氣力大に衰ふ。夜に入誦経念佛回向の十念終て。直為彌陀弘誓重。致使凡夫念即生。嗚呼助成南無阿彌陀佛と稱へて。寂然として聲なく



禪定に入がごとく選化して給ふ。正しく二十一日の曙なり。顔口笑をふくむがごとく活がごとく享年五十七恵壽四十三同二十三日南中嶋村宗福寺にて茶毘す。二十四日遺骨を拾に。齒ハ白く純素にして光なり。挙身の灰もまた紫色なり。記主禪師の滅後に類せり。師存日。西岸寺に地藏尊の石像ときどきみられるゆえに。遺骨かの像の下に納め。少分を[illegible]今なほ西岸寺に安置せり。奇なるかな師也。寶珠とりづうづう託胎を表す。ぢうふ三歳にして出家

の相と具し。長じて解行卓拔。大に興法利生を。在世滅後の跡を垂れに。實に奇特のつるなるべや。師の上足澄譽上人（始西岸寺を補し後大智に住す）の記をもて別傳あり。今ふたたび要をとりてふたたび侍ふ抑聞證和尚。ひろく道学をとりふるへるのなるべ。門下ふたたび人にすぐれて和尚の傳にそなへがたし。梅寒上人もまたその一人なり。アヽ此師あれば此資あり。此資あれば此師あり。今時吾曹。師弟相ともに非法を法とせるか。ふかく



慚愧をふかくせり。

## 蓮心法師　某氏女

法師蓮心。別に專蓮社。一譽。西阿と號す。年妻の郡南部川大橋村の產ふ。名草郡納所村丈六庵の開基なり。宿植善根のつるなるべ。若年の頃より。專修念佛し。口稱常ふたぐり。在俗の時和歌山にいで。ある武家に仕へて奴僕のしるしに。臂を張て門を出るに袂のうちに數珠をけるとて。手をつきて庭に蹲るふも舌の上

また念佛とやむことなし。ある時主人の前に草履を直さんとはるばる袖をうちはらひて尾籠なり。殊に忌つきものぞとて。預りの侍ふ下知あるべ。つゝ畏まりて蒙て。籠を置きたるにられど重き罪のがれぬべ。やうく免さるれど。永き年月の間思ひ出でゝ落涙あり。三度まぐ追籠られけるぞうらはるく思惟すく。我此館ふ召仕はるゝ既に十年いまかも怠らんとおもふ。唯此數珠ふちて。まびくれ沿を蒙もり。さらば今より主君と離

心のまゝに念佛をとゝ思ひ定めく。實とまいるとも乞ふ。何のまゝにまかせを得しらば。いくらでなく雜髮染衣しく一向念佛の行人とふなり。緣なるうめきの人までい人の奴にて。浮世の雜事に駈使られ身はぞいとも佛の弟子にて。後生菩提の上なる道に入るも経ふ在家為人僕從。出家為人主君と說もぞふ合ふ合ふ。かく和歌山の片邊ふト居し。念佛しくふ。ゆくゆく住在佛家以戒為本ときく。ひらべくれん專修念

佛の行人といへども。隨分に沐叔に受持すべし。いま
そもそも出塵の身となりぬ。かつがつ戒師とをもて
八齋戒をうけたてまつりしたがひて洛のほとり。
ある律師ゐをさづけ。盡形八齋の誓約をたもつ。また
淨宗の知識に謁して。專修念佛の奥旨を究め。
持戒念佛專ら專なり。かくて三年を歴て。
古郷に帰る。和哥山は城東。納所村といふ所に小
庵のありけるにをもむく。日課念佛三萬遍。阿弥陀經十
卷。禮拜三百。或は五百禮。練行重修年久しくして





ましぬ。德不孤必有隣のごとくなるべし。自然に利生化
他の益あり。稍盛にふるふなり。法師大願を發し
て。當庵に大佛の本尊を安置し。自他念佛の勝
縁となさんとて。普く四方を勸進しをはる。三寶護法
の冥助をや加へたまへるにこそ。衆人響きのごとく應じ。財
寶をこぞりて集る。諸縁速に具足し。石座銅身丈六
の尊像儼然として出現し給へり。又白紙に蓮華座をかき
布し。日課念佛おのおの百遍ごとに。受持する人の名を蓮
華座の上に書かれ。是を本尊の御腹内に納めぬ。一
國ハ隣境遠近に散

依て日課を誓ふ。年を経て百萬人余に及びしとぞ。そのころ人々帰敬し。月毎の六齋日などには。多く集て別行念佛を。即ち百萬遍の大念珠を造て。珠毎に金字に六字の名號を彫つけ。膝にふ蓮座とをぐるまる單布を置き。ひたすら數珠をとりて。同音に念佛せむ。羣參の人々。膝に佛をのづから手にひげ口ふさぐ心に思ひ奉るべし。そのころ親近の思ひよる。攝取の光も殊にそいかんし。法師の善巧ひとしくなり。道俗こぞりて感喜しけり。化他ぐれをも



まぐる。自行いよいよ進修せり。ある時宿願のことありて。善光寺詣するなれど。暫く衆人の參詣あるまぎれきにを示し。門戸とざしうけ篭て。わるんどとをした。堂内を行道念佛をすること六十日なり。アヽ身い紀の路にいりなば。心い信濃路をや運びもん。佛の来たるとぞ。人の詣でくるとぞ。感應道交難思議。實に良策といつる。熊野等の霊場へ詣づるも大きなかれば。せんなり。ある夜盗賊ぞいりくるとぞ。ある物のうぢり皆そりいで

これとうとし。三寶物とうぐつい。殊に重く罪なふ。ま
づふりの世とすぎんそ。そうなれ惡業と積く。永
き世のうたうとうんぞん。つ不便うと。徹骨の悲心
を発し。やがて彼等が滅罪の為にく。二夜三日
の別行念佛を修せるい。つありがたためそう。
此盜人も同じ罪うい。好縁ともうい侍りけ。発心
修行遠うし。當来の値遇もうさうもがたしこれやげ
に逆即是順の謂をうん。又ある時室内ふく鼠の
死しるとうく。うの得脫の為ふく。二夜三日の

別行念佛を勤修せ。まで無縁の慈悲深うもし
うれうとうてけうり知ぶし
法師忍土の縁盡く。樂邦の生熟しうう。明和
五子歳の夏のうろう微疾あり。八月四日常に
出入けう尼衆に對し。我平生十五日に終をと
うぐしと思ひしぶ。報縁うぶうあり。明五日午の剋
に往生とぐ申す。今うりのうい。尼女の輩。此室内
ふ入ぐうどうく。沐浴清淨ふて臨終の行儀を
うのく。弟子兩人とうふ念佛を。五日の朝一人の

弟子に身をまかせ。端坐合掌の手に平生念持の本尊をとり。一人の弟子に鉦をとらせ。高聲念佛して来迎引接をまち。そのしるしふ違つゞ。午の上刻ばかりて。禪定に入ゞ〳〵奄然〳〵化寂しぬ。世壽七十歲なり。諸人羣參して。容儀を拜し。感涙袂をぬらす。信敬彌〳〵。念佛の聲ちまたに。法師存生の頃和哥山。中の嶋れ町ふ何某の女なるもの。病ゆへ一日俄然として息絶ぬ。ぬれど胸のあたり煙氣いまゞ殘りたれば。葬ぞのまゝもなぎり



〳〵ふ。一日ばかりありて。ふたゝび蘇生して語りていはく。我極樂へまゐりしぞの結構ふべきまでもなし。玉のごとき寶れ池目もあやなり。鳥の聲樂の音。きくもめづらしく。處〻七寶をしきつめたる宮殿あり。側ふ人あり。是へ誰〻の宮殿なりと教へるれし。中ふも殊にかゞやきうるはしき宮殿あり。これをたづねんに丈六庵の蓮心法師神棲の宮殿なりと答へるれしゆへ。その法師ハ我あるれ念佛の導師なれば。幸我をもこゝふゆき置まゐらせんとわたゞ〳〵ねがふ。汝はいまだ生緣熟せざれば。今一度娑

婆に帰る。念佛精勤して。重ねて來ぐべきのよしを。夢の覚るごとく。ものがたりて。この餘の女ども。往事を語るに違いなくも多くありきと。それより念佛無間に相續して一七日ばかりの後正念めでたく往生しぬるとぞ。此女子の神遊するに蓮心法師あり。浄業成辨し。報土の宮殿先にあらはし明るかるべし。況や臨終の行儀ゆゑなり。ただちに時日とけ。正念安祥ゆゑ念佛を息えんとす。女子の感見と。法師の往生と證し。法師の臨終と。女子の感見と證せるゆゑ。誠實なるべしと信ぜざるべし。さる法師の教化ゆゑ。念佛往生と遂し類ひ又如ゆゑ。その中に五三と後にあぐ。具に記せるとぞ。

贊云宿善開発して任運に発心し。持戒念佛して二利速に滿ぜ。丈六の佛像日課の勧進。名号の念珠巧に人として至誠念佛せむ。むべかな業事ゆゑに成じ金殿のごとに現ずるこそや

嗚呼ゆゑめい武門の一奴僕。一朝発心の後人天

の大導師と〳〵こんにちまうたうべくせん。今時如實の修行を忘れて名利の学文のみを好み空腹高心ばかりにして義を談じ法を貶きいたづらに空無我を観ずして我慢のみを増上せり。自己の脚跟下を知らざるのみなり。愧ぢべきのみ。

妙秋禪尼

智光院月休。妙秋い。和哥山の漢れ中村林右衛門が母なり。深く蓮心法師に帰依し。日課念佛六萬遍を誓受し懈怠なく勤行せり。玄冬あり烈く寒氣膚をさくの折なりも。未明に戸外に出て蒲團をしきうべ。頭巾をもし著て。西ふむひ。晨朝の勤をしたり。此相續ること久しく老後ますます怠らざりしかば。その娘なるもの念佛ぶしまで。佛のそばにきて。ひたすら身を凝し給うべしとなん。おのづから御老体の御身もいたはりなどいさめられて。みづからも〳〵なる邪。ひたすら如來の。五劫思惟兆載永劫の御修行とやうにいへばいとうれしく御慈悲に報

ひ奉らんとて。骨とくだけ。身とつかれても。なほあたまれ。
ちれど凡夫の身ゆゑにたぐりに及ぶべきにあらず。責てもの
身とおもひ〳〵。念佛〳〵おこたりなくつとめふ
止ざりけり。安永六酉歳。九月の頃。ひさしく煩ひくるゝ。廿
三日の夜。娘の膝にもたれかゝりて。高聲念佛をとなへ
三十四五遍して。うつらうつらとなりぬ。休息をとゝのへんとて
ねぶるの〳〵息止ぬる。時ふ應〳〵一室照曜
すること白晝に過たり。經曰行者即見化佛光明遍滿
其室見已歡喜即便命終し。佛說虛妄なし。誠諦



實言ふ〳〵信樂をとゝのへたまひ。心を
むなしく法藏菩薩。超世の大願をおこしたまひ。心を
五劫の思惟ふかくして。身を兆載の修行ふくゝめて。此
願をもつて。衆生ぐるをたすけとるべくい。縱令身止諸
苦毒中我行精進忍終不悔と〳〵ものたまへる思
召さたまへるらんに。ゆゑ〳〵願をなを
それと誰が爲とうかがふに是我等がたのふこと。
ひとり超世の本願にたのみて。大善の名號をきゝえ
つるん。これをうたがはぐ。大慈大悲の善巧。難酬難

謝の佛恩なりだんにいのちとゞまりて。ゆるさ
報じつくさんやうぐ〳〵。身のゝえんりゞ。ゆるゝ〳〵。
むくゝい奉つるべし。以上本願欽の所々とあてせ
出をつゝまにゆるゝ
妙秋上人此意を得ゝり真實に出離を思ふ
ものゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ

加誉祐玄信士

信士俗名長八鹽津浦の人なり。ゝれ子何ゞ
病死せり後。上人世の無常とゝり六十歳よ
ゝ世縁と放下し。酒肉ハ口ゝく。煙草も禁じて



一向に浄土の業を修ゝ。剃髪し〳〵祐玄と号せ
ゝ。時々蓮心法師の許にゝゝり。浄土の安心を聞
得ゝ日課六萬聲を誓受し。世事とゝゝゞ。雑縁
に近ゝゞ。朝いつのゝゝゝゝゝゝゝけん。鶏鳴に
先立ゝ。佛前に稱名の聲ゝゝゝ。夜ハ更ゝけ
人ゝゞゝゝゝゝゝ。仰頼救我のゝゝゝ長にゝゝゝ。
年のゝゝゝゝ隨ひ。先期ゝゝゝ近ゝゝゝ。常課
の外と加倍ゝゝり。明和三戌歳十月。いゝゝゝ不
食の氣あり。命終に先ゝゝゝ七日。家内ゝゝゝ

かゝる浄土の往詣ちかきにあり。穢土の食事もこれか
ぎりなれば受用せざらんとおもへど。心残りにおもはれんことの来
るべしとて。まゝ家内美膳とまうけて進めければこれを
食しけり。沐浴更衣。臨終の行儀にかなひて。勇猛に
念佛す。これより断食にて。たゞ白湯のんどをうるほす
のみ。更に苦痛の氣もなく。同二十六日まで念佛相
續し。それ聲は息とともにたえたれど數珠とる
指なほ須臾もはなたざりけるとなん享年七十四歳なり
此子十助も老後に念佛しけるが往生を遂
げり下巻に出せる了祐法子これなり

相誉事頓禪門

禪門俗名は。重根屋彦右衛門。海士の郡黒江村
の人なり。その性篤實にして聊も妄語せざりし
かば。人これをもて證識とせり。されど若年の頃
より。深く本願に帰し。専修念佛す。紀三井寺へ
一里の行程なるに年久しく日參怠らざりし。ある
ときは來迎引接ありのかたりしかど。享保九辰歳正
月疾あり。みづから終焉のちかきを知りて。同月十

七日を約する發心者とも。臨終の知識
に。香燈を捧げ奉り。聖衆來迎の
時とも念佛怠らざりし。正しく臨末に妻ふ
傳下に出 奴壽丸むかへ。今御來迎あり。佛前に蠟燭と
ひぐべしとのたまへ。御手の糸と。合掌の手に
とり。傍らに鉦鼓とうちならし。光明遍照の文と誦
し。高聲念佛百餘遍ぐうちうち。聲をもふ息と
えぬ。時にわうて西天に紫雲ぐたなびく。村人多
くあつまりとんる。葬式の折ぐ。西國順禮の旅人數多



通りあひ合ふ。ひてしく先に藤代山みねにうる紫
雲ぐ。此往生人の瑞をんぐ。大地に跪き隨喜
念佛しけるとなん

一峯宗夢信士

信士俗名。重根屋彦三郎。先の彦右衛門の聟ふ
ぐ。實家養家の二親。ぐく專修念佛の行者な
ぐうぐ。彦三郎も少年の頃より帰敬三寶の思
ひふかぐ。澄月上人傳別記遊行念佛ぐ此
地ふ來らぐ。我家に請ぐ入ぐ。恭敬供養

し。本願念佛の深意と研究し。一向專修の安心と交擇そ。ふ〳〵厭彼の心と發し〳〵。日課念佛を誓約し。ます〳〵衆人と勸め〳〵。誓受せしもろに親屬けいしやもろ〳〵村中悉く教化に帰そ。これふしぎ澄月上人。ぞ〳〵く此所に留錫の間。衣食住ともふ。皆此彦三郎がけ〳〵ふんなり。そのほう性山。待雲二師の德を別記の〻體信傳下卷出 等の同法の上人来そしるくるとも。皆悉く供養尊崇しくるとそん。寛延三午歳秋の〻ぞ俄に病ありて言説をるとなし。たゞ先せる



人のこゝ〳〵。醫療術と盡せども更ふそしなりそれど。今は佛力とそのむの外なし〳〵家族打うこゝそ念佛そ。一日ぞうわり〳〵。ふ〳〵氣息ふそ出し。蘇〳〵るまぞ〳〵目とひらきくあたりぐるたことなり〳〵といふ。勝境ふう神遊しくりん。家内親類さつぞ立〳〵たゞ喜ぶのこふ〳〵。そのこととれぞり〳〵ぞるやき。同月九日。近隣の萬四郎とい〻者。頓に命終しくるとと告来そくれば。家族こぞりてさそけるなき人の命やきのこれ夕ます〳〵来そて念佛せ

一人の。くるしみや身まとりるこを不思議なれとこれ
あるふりと。彦三郎きいて。何とそれぞうなるこを
で。我も人をあれこをぞうなりあれど。誰人一
人を止まるべき。ひたすらとれと起そべしと抱き起
され。合掌して光明遍照。十方世界。念佛衆生攝
取不捨。南無あるべき佛と。高聲に念佛を。これ
新亡の萬四郎が回向をなんとこをふ。そのまま
息をぞりふり。
抑澄月上人。當國みな念佛化導をされしに。



此信士とも首先。衆人を勸誘して化
益普うるを。此所ふ專修念佛興隆し
て。目出度往生人甚だ多しとそこれ。此
信士篤信の因緣にこれるまなり。

## 妙壽禪尼

禪尼俗名。や。先の重根屋彦右衛門の妻なり。
天性慈悲心ふて。施しと好みこれば。從類眷屬よ
り。非人乞食にいるまで。こるまのぶふ金銀衣服飯
食等あるふやうぞこれとうぐ。そこふい人目を忍び。

あるべき法はなしとぞいふべくらんけり。ある尼の著料みづからけ置るまれてぐるみで。例の施行みるに思ひ尋ねれど。更ふ覚えざりしとぞいふ。ぐうしたやつるとぞいひひふ。程経て後ちぐろのるまるるりしと。本家に来て謝るものあり。ちていて誰をふとあるべきとうふ用侍るといで。ぐうち笑て言葉なし。ぐるある僧来て衣とも。禅尼これい隠室なれど恵むべき衣類なし。本家に



にてこれ多くいでぐの僧殊のやうふ寒く凌ぎぐるめれど。いうるまるもあるれべたまくとかぐちれば。禅尼今は堪うの。身ふ着る紫の小袖とめぐ。これもくるぐやたくしぐ。かの僧あるふるべく本家ふてりて又れるぐるふ禮謝せり。例のなればぐしげなとぐる。餘ふ過て覚えれぐたぐちりとりがる。子息彦右衛門。行乞僧の身ふ應氣なくりて。あるるんとて。鼠の布子とるくとをれぐ。

の僧にあらずとぞいひける。隱居所ふるりくえん
もなし。禪尼素膚のまゝ火燵に蒲團ひき覆ひ
居られけり。かの小袖とりとこれいとりくしめるかゝ
驚られる氣色なれば彦右衞門いとく。鼠布子とりう
へあるべく侍るなりと。禪尼らくてけりなりてとく。大
にあらこゝろぐれるなくく世の人の物を施すも。餘長
ありくとする習ひなるふ。身ふ着るものもあらぐ
なるくしふ。ありがくれる志なくしや
又田舍の習ひいとうげの殘食とば水穀うち交

さ一器に留めるくふ。これを雜水と名づけ。牛の餅
となるるふ。この本宅の牛に雜水とあるぐふ
のくばこれを告ちくらふ。禪尼ぐうくく手とく
うれうぐしくく。ちくなくる。そのもとは。梅の實魚
は骨なぐなるふ。牛の咽細くれば障くなんとあられく
てなり。生質潔癖あるて。手水をどもうく念を入
られる人のくくく穢らうき雜水と。人ものづく
ぐ。日毎にぐうく試ぐくれ。慈悲深重のくう。非
類ふぐ及ぐるなりうくく。澄月上人と拜くく。專修

念佛の行者はなり。長時の日課八萬遍発願の
くるより老朽の後にいたるまで。晝夜ふ怠
らず。行住坐卧ぐ手とくべ。念々不捨勇猛
精勤なり。安永二巳歳正月二日より不食の所労
あり。十九日より殊にすく。廿五日ふいりて眠る
がごとく息えり。微の苦痛なくして。死相なく
して。寿九十歳なり。火化の後骨とりもろう
舎利ぜびたくありなれど。うたがはるる
ことなん。禪尼吉水の正流に沿して。一向專修蓮



修年久しく。正月二日より病を発し。二十五日
に往生しけり。その發病と命終の日。ふ大師
みひとしも。等閑なるふるまひして。宿善の餘慶
九十歳ふるまひ壯健なること類なし。生涯眼鏡
とりあぐ耳目分明なり。慈悲深重ふ檀度
を好まれと思ふふ経ふ佛心者大慈悲これなりも。
菩薩者慈悲為體しも侍るぞ。此一善もなほ往
業に回向しつぐ。ひるとまして專修念佛ぞれ
ば。因圓果滿なるゆゑくたふとし

鎮譽榮俊禪尼

禪尼俗名。久米。先の重根屋彦右衛門の娘なり。貞實柔順なる。婦人の龜鏡なるべき生質なり。盛年の頃より今様の衣紋模様などすべて用うるなく。たゞ狂言音曲など更にえきなく。三十ばかりの頃。夫に離れ。五ヶ年の間引籠て。足をとゞめず。後は所々の寺院に説法あれば。ひそうふ詣で片隅に居て聽聞を。往来みな。人と雑話をなさず。神事祭礼なども。人のうるさく時は。曾て出ることなし。常ふだんの。後世の道しるべとなる法語ばかりを。日課念佛五萬遍を誓約し。年來怠ることなし。澄月上人に隨長日の佛供。臨時の僧齋。つゝの料理。奴婢を男せもの。朝は西の窓に望て。たちまちも心をうけよ西の空雲間をとゝけて。帰る古里をうち吟じては念佛し。夜は北壁に枕して。佛と十聲をとなへて。ねむるなどわすれてなりもて

詠じ念佛を。かく願行功とつゝ運心年と
うゝして。八十のゝとむくらゝゞ身體ゝやうゝ
四儀に人を召ほうゝなゝゝとうゝたらちうゝを病
とうけて。それ夜初更に南無阿弥陀佛〳〵兩三
聲聞えゝ。安祥うて往生ゝり。時へ安永七戌歳
二月二十五日ゝり。遺言ふゝゝ茶毘ゝ一筋のけゝり
ゝらゝゝゝゝり。人々ゝゝゝ傍に終夜念佛ゝ。火盡
ゝ骨と拾ふゝ棺槨の灰形用々ゝ蓮華のゞゝ
胸ゝ覚ゝゝ所に華形の舍利儼然ゝり。ゝゝり

二すゞゝり。葉の色異みて。青黄赤白黑紫等。炳然
分明なり。ゝゝ青色みゝ浅黄のゝゝり。赤色ゝゝ
桃色の緣紫色みゝ藤色のゝりとゝり。鮮潔に
ゝゝ愛ゝつゞゝ。小粒の舍利その數そこゞゝの
ゝ。ゝゝ惠心の僧都の御胸の蓮華にゝゞゝた
ふゝゝりゞゝゝた

玉譽淨慶禪門

禪門幼名三九郎。後彦右衛門と呼。先の重根屋
彦右衛門の子ゝり。八歳ゝり日日ゝ念佛ー

盛年のち澄月上人に帰し〻常課六萬聲。ある
時ハ八萬十萬とゝくゝる天明三卯歳十月廿四日
持病おこりて一切に言語なりそれど。妹の智品
傳。次に出 傍にありて念佛を。それ夜ふかりて禪門高聲
念佛をゝ〻二三十遍。次第ふ微音ふなりて。最後
ふに南〻とのゝきこえて息絶ぬ。齡六十八歳也。
火化をふ舎利あり。丸き大骨に糸のふされどゝ奇
麗なるの生いづるふあるさつまりそのいろ黄赤
白黒紫照然うて明白なり。小顆の舎利も又不火



戒譽智品禪尼

智品ハ先の重根屋彦右衛門の女ゝ〻彦三郎
の妻なり。支命終のち眼前の無常にせどろき。世
中あどれなゝ覚え。尼ふなりてゝ思ひ定め。髪の
ぐりなども人ふあとゝ鼠色の衣服をとゝの〻朝暮の
勤ふれと著ゝ念佛をり。ちてゝもいろぐゝなゝ
ばそゝび嫁をぐゝ。母も姉も同じくすめゝわど。
心の外にせひ煩ひ。澄月上人にいでをゝと尋け
るど。上人のいゝく。往生の勤ハ念佛ふゝたり。念

佛ぶつまつれど。世のあらるゝにそも角てもあらさん。
縁ふかくて けふ〳〵にいたりぬ。母姉の言葉ふ隨ひ
紀三井寺村。宮本氏ふ嫁そ。その時も日頃念持
ちたまふ佛の像と。我佛〳〵持行たりなく婦
人のたしなひ。日ごろあれる折ハ。髪のうぶり。身の衣
服ふこころとゝて。世の譏嫌をのゝ憚るまぢ。さるを
念持の佛とゝんもちゆきたるそ。後世の道うしかふほ
どもあらるべし。明の龐牛居士ゞ母。嫁たるに觀
世音の像をとゞさゝゆたしと。雲棲大師ふ〳〵歎美し



たまふ。さうれどもうまい出離の為ともきゝたれ。
解脱の志なり。浮世の小節に拘らぬ〳〵出離
の大事と慮たうる人とやはなん。三十五歳
の時又後の夫身まりぬなだに別をのなげきたく
ちふ。四人の子れ養育。世渡る業のこゝ。日
課念佛も怠ぬ。心の外ふ紛を暮しぬ。漸
諸子も成長し〳〵。家業とうけつぎ。ちうい他家に
行なゝ。今ハ自在の身とりなれど。髪をなたし
て智品と稱たり。ある時洛にのぼり。何ゞ律師

に授戒し。國にありて有縁の知識と拜し。往生浄土の心行と精究し。吉水正統の真決を口授し。念佛修行もつとめをこたらず。常につゝく年頃日頃浄土を願ふにつけても。極樂の體拜をゝもひ心とをづゝ目をとゞめて寶池の蓮たゞみるいやるふ。ゝつゝうあるゝ野山のこゝふこゝろうりゆゝ侍る。心れいろの外にえゝるべゝをれ。實に極重惡人みゝあるぞかし。佛のちゝひあるゞこゝ。かゝるはゝうた身かゞゝも。往生を遂らめゝ。うち涙ぐゝて語られる



りれが親類の人々。自身の孫なりの。念佛をゝとゝてい
ゝゝなげゝゝ。後世ゝも他人ゝるゝたふりくゝ
いゝするゝん。三途に迷ひなん。あはれ。うち
うこゝろ。づゝゝ親類の許へいゝり念佛とすゝ。知識
と請ゞ男女とゝゝぞ。隨分の日課念佛とうけしむ。
その外。立入人々めゝつゝ奴婢いりゝり。洛に往
來の旅宿なゝゝゝも老若男女のゝゝゝ。無常
の世ぞかし。念佛しゝゝ。極樂にまゝるゝりゞゝた
ゝゝゞなゞすゝめ。人の後世心をゝく念佛をゝと

こんくれ。我身のこれやうふなげうれそう。果報の分と
そうぶて。子孫の壽福とのく求う。妄執の癡愛なくて。
三界火宅の苦と救ふ。真實の慈悲ありそうしいて
たよそう。寛政十午歳の春いく。我も今年ハ往生
そくくなげう。御暇をに上京し。大師の御忌にまゐ
ぐやして。子息夫婦と同行の女とともなう。華頂の
霞とこうけく御忌の法會ふ拜奉し。その外所々
ふ詣で。岡崎の澄月上人とこうひ。ぐもの今
生の拜顔これうぞりなるべーとて。ねもごろふ浄土の

再會と期しく帰國ち。
二月四日の夜夢こうく。西の空を詠うふ。うちこうく
明らうるり。心ちぐしくこうるぐうちふ。阿彌陀佛真金
色うく。御丈一丈ぐうなるが儼然こうわうられるね
ろうち。心のうちふこうを真如堂の如来なりし思ひく。
こりうりこれぐ。忽然こうして。東方に同じくけうる如来
現じこうる人。心の内にこうぐ嗟哦の釈迦如来ろりく
ぐうち人。二尊こうふ相好圓満うく光明赫奕こう。有
ぐうたくくんうさうく。至心ふ念佛しく拜聽し

奉て。子息七太夫の妻に拜ませ給ひし。聲をあげ
く。さきりふ。ぱらめくとしびるふ。目ひらて。七太夫こハ魘
とゝ。うちやうろうに。夢さめ。覚てなゝ 両尊
の聖容。目前ふゆて心地ちとて。まるうち七
大夫ふ命〳〵記し置しむ。
三月六日より 和哥山。小倉専之右衛門 禪尼の孫
の宅ふいり。八日の朝例のごく 西の空とうち
なぐ念佛ちゝに。あッと感歎〳〵五体と地に
なげ。高聲に念佛せるる。その常に異なりける



ぐ。やゞ〳〵貞性尼 禪尼の女 敷の右衛門の女也 ふむひ。諸根悅豫し
ていく。我毎朝西方にむひ往生とこのり。佛を
拜ミ〳〵むひ。上品の如來ふ心とうけ十念を
〳〵年久し。今とゝ今。念佛もるうちあゝと佛れ
真容。相好圓満みて。端正殊妙なるゞ了ゝ〳〵
拜まれまゝり。有ゞ〳〵身ふあゝり。心もひろゞ〳〵なり
侍〳〵て。歡喜の涙せゝあゝゞ。踊躍〳〵語られと
ゝれゞ。眼色〳〵ゞなゝゞ。ぐゝ見佛のゝゝわらふゝ。
貞性もあゝゞ〳〵。とゝふたゝとゞりしと

なんぞ。されどうるのこゝい洩ときじゝまをかど。我
生ゝん内にあるこゝ人にのるべゝ。のゝ制
ゝく。ちく念佛せられそう。されば應聲即現の巨益
も今更ふしのりく。垢凡女質の往生もうさびい
らぢと。ちりぐゝこゝそ。
同十七日夜積氣つく起ゝ。程ゝゝ
ゝゝかぐも。飲食常に減ぜうぐ。ぐう臨終ちうた
とゝり。專之右衛門ふしうひゝく。我爰許みゝ往
生せぐゝゝ。專之右衛門ゝものゝ。ゝれ



みゝ御往生ゝゝゝゝゝゝ。大に喜び隱居所の
ありゝふうちうて念佛せり。のゝ歸依せれ
僧の浪華にありゝ。ゝく告ありそれぐ。ゝうち
來ゝく臨終の行儀とその萬ゝろと加へ。酒肉
五辛の人とちけ。世事と語ゝと制し。ゝ一向ふ
念佛し晝夜當摩の變相と細釈し。夜い來迎の
賛と詠じ。とくに欣求の心とゝむ傍に迎接の
像と安置し西方に上品弥陀の畫像とゝく。禪
尼こゝと拜ゝゝく佛の御ゝふまゝぐゝ

ゑりをこちく念佛を。不食なるべうみく。病もなく身心安適なりゐれど。隨分念佛相續しく怠るこなく。ちれどかくの人ちり。出入もふいるるまで。念佛をいなりゐれど。臨命終の夕べ。數十日の間室内朗々として。念佛の聲しるることを。五月九日京ちり。去る二日。澄月上人命終のし告來まり。是を聞く高聲念佛まること二千餘遍なり。十日の夜いとおやうくうゐれど。うの僧こふ心と加へ。枕の邊みく引磬となし。靜に念佛を。禪尼もかをふ

念佛をる聲のこなれど。諸人同音に助念をるふ數十遍のちゐ。唇舌のこ動き。ちりく息こえちり。寛政十午歳。五月十日夜半。壽七十七ちりき。抑病ふ深しちり。今際の時ふいるるまで。勝緣具足しること。たぐひなりしいるべし。ほるく恒願一切臨終時。勝緣勝境悉現前の文と唱へく念佛をし志の誠ゐれく。祈るこのこりゐりと。てゐ賴しく侍るぞかし。十二日紀三井山に葬る。頂しも五月雨ちりづきて晴間もなりるぶ。葬式の剋

う。雨降れども。諸人皆感じあり。和尚山より見送り同行帰る道とぐ。夕陽山ふくと。西の空うるわし。光雲色とりどりに棚引曜くとき。過し頃い穢土の同行につれり数遍とくはじめり。九品の新生となりぬるうらやましき。今い蓮臺の聖衆ふよう誰う最初の引接ふあづかんぞ覧とそうらんと。各とりたりし。誓因とい老尼その第一にうるべく歓喜しけり。其誓因尼の傳下ふあり。

謹て按ずるに。初の感夢い両尊遣迎の相と現して浄宗出離の故実と證し。後の見佛い凡入報土の術を示し大悲本懐の密意とうつと。前後の好相。真に奇特のきわりなるかな。

同志の人。黙しに推知べし。

○抑事頓。念佛往生の後。親族是にとぐん。今生の骨肉來世い一蓮に生ど。あふ快樂なるだ。世の人々眼前の恩愛に縛れ。業力ふ牽引れ。六道に分離と。身とへ面とへ六

親相悩害しふるうしべし。願くは専修念佛し。今生値遇の縁と空しくすべし。當來九品往生の因とすべし。

## 捫蓮法尼　其第。清圓尼

法尼捫蓮俗名しれ。西名州郡。目方浦橋本氏何某が女なり。それ質廉直にして。女人尋常の愛執浅く。財利と貪らず。女身と厭惡して。身命と愛すること甚だしし。その第何ぞ。十一歲にして身まうるが。臨末に父が手とりて。我ゆくえを





さとるぞ。必迷れるな。西とゆびさして念佛しなば息絶にけり。その後父母の骨髓ふるひ。愛別腸をたちうべ。さきふ世中うづさなくなりぬ。そうそうのうち。年頃世渡る業として酤酒とやめ。肉をたち又毋各日課念佛八萬四千遍と誓約し。浄土の再會とこのみて。專浄業となんしし侍てをる。それより。女はも十七歲より日課念佛一萬遍と誓受しけるが。三萬以上上品往生の說と聞得て後いよいよ三萬遍と修して

ゆゑ常はなしなり。十九歳の冬。何某の子として
ぞうしてこれを娶そ。翌年妊娠しくる。六月中旬より
日課三萬遍と誓ひ。大ゝ常に六萬遍いとゝく
くり。そのゝ平産しくれも不幸ゝゝ其子しきく
なりゆかぬ。これと悲哀しく氣分例そ。翌年
正月三日頃より。きりふみきりうば。父母ちもと
なげき。醫藥看病殘るとなく心とつせぐ。それ
験なく。日日ゆくふゝとぐい。念佛つよく勇進し
く。死と恐るの風情なし。六月初より。病ゆんく

みりくれど。必死のおもい決定しく。澄月上人を請
じ。佛前にて日課七萬聲と誓約をそ。その後い他
の見聞とはづうくど。專修念佛の外。他事なして。
感喜の色外にうくつる。ひれど尋常の人なくば。
病のくるをふみのづゝ。念佛も怠るべくふ。をろる
にてさびしく。かく多念にくげくるふど。信心のよう
にぐもうくくなし。人ありくひとる大病なくゝば。
ちどくく本復ひんなどぐ。ちぐさあきこめれど。憂の
色面にうくれ。親切の輩ありくふ。かる重病いう

でう本復するぐそくぞ。もくぐそく念佛とる忘はるるひそく
いはば。勇喜は氣色よそりかくく氣力漸くそりて
ゆたるべ。七月廿日頃より大くく床ふつきぬ。同月
廿五日の夜。父母病人とふ牧帳のうちふふくる。夜
半ごろ。くれ。聲とあげく。あくにてもくくれ。ろく
のぞうけりごくやふむうくく佛くく數遍念佛く
るやく。又うち驚きく。へふ夢ふくもくんとと。
こくくくくぞ。ぞうぎりたる廣く大なる池に。お
びくしく蓮の生出るる。そのろ五色とも七色

くもくれ。得もこれぬいつくく花。へうたくいく數と
知らぬ。これなん極樂の八功德地とおもひ。有ご
く念佛くく。ふくのくみもあるべ。過く廿三日
の夜は上品のうぐ佛くさげくく。三尺餘の坐
くくるく如來光明と放らくくたまいくうぐ。
我ときふ助くるくく。御衣にすがるくくく夢覺
ぬ。今度は一定往生く待らんとのうて歡喜くう。
八月廿一日の夜くわぐ苦痛ありなぐく數珠とくるく
ときりくて。高聲念佛二時ごう。看侍の人も申つれ

し頃。こたへつゝ西のそらと指ざゝ助をむかゝ
ゞ佛。まゝ指げゝ南無阿弥陀佛し。高聲實に体
とゝむ。おりつゝ聖境の現でゝなんつゝの人はうゝ。
何ゝし尋げしでゝゝ。同廿二日の夜。ひとゝふ父
と招き我此ゝら。そゞけをしゝ。そゝふゝら。眼に覆
ゝゝ。そもゝつゝく。氣分も殊ゝ勝るゝゝ覚也。
ゝゝゝきりたゝんゝ。何心なげふひるゝと。父い
まゝうゝゝこふゝゝ。たゞひとりあげるべ。
ゝれゝんけゝ病の障ゝゝゝをしゞひゝくふ本願

とたのゝゝ。往生を願ゝんゝう。ひゞりみゝでゝゝ。
別ゝ助ゝゝもあゝじ。そゞゝのゝゝ念佛でよ
ゝいへげ。それがゝゝ。ゝれゞ往生。ゝゝひべ往生せ
ゞゝゝゝれゝゝゝ何ゝなゝむつゝゝ病重ゝつゝふ覚
ゝゝり。命ゝりゝゝゝ髮ゝゝゝ。死ゝゝくゝ何みゝせ
ん。暫くゝゝゝ苦ゝ助ゝんたゝゝゝ餘義ゝ
くゝゝれゞゝもゝゝ女の望ひゝゝゝゞゝんも
本意ゝゝゝゝゞゝ。年若ゝゝゝゝゞ。萬に一つも
快氣ゝゝゝた。第一ゝれゞつれゝゝ。夫のゝゝゝゝゞ

親類のむつまじきこと。これ恩愛にまどはるゝ。
こゝもせぶりくるふ。病人くるしき聲音ふるへ。ちからなく
よのつらを。此黑髮をうしなはんほど。へつて我心にかゝるべき。
誠に我尼となりしは生涯の願望なり。是まぐれ
こゝろざし。今はこゝを。此世にたゞぬべくもあるべき身也。
死なる命をこゝろぎまる世なれば。こゝろ。今二三日
も過なば。棺のうちに剃落を此髮と。こゝろもと
こたへまうす。かゝる御心ゝ。恩愛の纏いつの
時こゝろえんぞ。ちからなく病のさつりと



なりこゝろこたへぬ。ひとへに理をとゝげて。願ひと
こゝろをこゝろ。幸明日は往生人の三回忌なれば。
結縁のため。今宵剃髮侍るべし。落る涙ゝ。
當所に清圓といふる生質愚直のまうす。尼子
多くもちもちかゝぐ。二十年來尼となりて。
常に念佛をこゝろ。三年前八月十五六日頃
こゝろ。ところ所あり。念佛常に異なれば。廿三日
八ツ時ごろ嫁子もあつめ。念佛すゝめ。我
今極樂に往生せんとて。その身も勇猛に申入て。
次第に聲ひきたりける。折ゝ知識きたりて。十念
をとりつけらる。清圓分明にうけ申。二十遍ばかり
ぐゝ往生せり。時年七十九。光相莞爾として生ぬ。
また。平日のの清圓。尼となりて念佛し。また往生せ
こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。
三回忌なれば。こゝろ。こゝろ。こゝろ。こゝろ。

女げ智辯なるふ。へに詞もなりしうに。親類
にぐりのく〳〵告りつ。その落髪ともり。病人
うれときうちろうこびもくといくみぐ。大
病のこなれど。剃刀そど用んもおうなんく。
くさもて念佛の聲もくもふ。終にまぐさときり
落し。又はたくる涙とおりぐひつ。みくれの髪は
ぐくくくりぐちりくくる髪とおつめたりあ〳〵棚ふもく
くれど。病人うれとうん〳〵ふくの髪。おくりふ置もこ
とくれ。今ぐ我身の障ことなせ。むくきく



なたものぐくうふ捨くと。又と制もる詞のた
ち。實にうたくたくきぐうくる。嗚呼女子の執
とくらるもの。黒髪はなくふうん。りるとくうぐ
ムく糞穢のぐく。切ようく。塵芥ようもりく思ふ
は。若き女のたりぐくみもあうん。又ぐ涙くりみも
過くり。のくく。くたい。手あうん口くぎ。たう心地くや
我いくや出塵の身とりぬくぐふ愛網の一つと断
く。たくく快氣くく又くく。本懷なくぐくれくた
く。顔色うりぐふ。へぐいうは讃くく念佛ぐん

く。いくるつく聲ふく。うとけけ。たうふさく
くれど。又もなげきの涙とどめ。ふ和讃念佛し
くれど。又母ぐるげうもうちまぎれ。その夜もさく
更ゆくく。病人ぐうくめうとなぐ。臂とのぐうち
なぐ。ぢてもやせくり〳〵。骨と皮ばかりふるく。見苦
しき姿うれ。今二三日も過なば。此なたうと棺
ふくれ。山ふ送て。火とうけく。焼あぐるぢる極樂より
くくんけ。ぢて心地くくん。すくや此世になぐく
たりく。いくちぐの命ぐ。とくもけく極樂ふまく



んと。ふくくくると。きく人くくとぐりる。
あくれば三日。永正寺嚴譽上人を請ぐく。剃度授戒の
作法とくて。袈裟血脈とうく。法名を歡譽掘蓮
とぐけくれる。ぢく〳〵一足も西にちくくぬりと願ひ
しうべ。家の西ふる隱居所の佛間へうた入ぢる。直
に本尊と拜くく。あるたふと。如來の尊形。つもち
殊に大に拜くれるくく。合掌念佛くくく二時
ぐり。又母もくふくく。掘蓮聲も次第にひく
ふりくる。忽ち西の空とくわげく。笑とくく怡悅

れそきなのゆふべ。ゑえくれい。又母何事ぞとこそ。
いづれも拜ミまゐいぞや。只今阿彌陀如来おはいれ
まひ。我しゐと三度なでさせまひ。汝おさまりた女人
なわれども。此度一定上品にうまれしのさまもえ。必
すくいせまゐて。御衣にとりつきまらぶ。報命つる時あり。
今二日と過ぐ必来迎よびあらく疑ふことなれ
ども。かくつふはりぐれる色る大木あり。その高さい
ばくしくとそびたる種々のいろある華。咲ける中ふ。未
實あり。其うち輪ちびのごとくなりて。手ふくれ色

て。くれ實と。如来の御手づからとりて賜ひしうべ。又
と食ふ。それ味ひたまひぐきものぞ。それより氣
分何となくちからふかり。唇うるおこれえまえ。うる
つうんといと。顔色ちらぐ快氣にええる。それ夜
母にむひていはう。我日頃上品往生といわぐひしう
ぐし。我ぐれ罪障の女人。いらぐ上品きぐいし。常に
疑ひ侍りぐ。ちとくく佛の御告と蒙ぐ。
つぐ思へぐ。我身れあきのに心とあく。けう
なく佛の御誓ひとべ。愚ともうむひまぐ浅

すくなりしが。今はゐる。うたがひの雲もなくなりけり。上品往生掌をさすごとく決定し。此世のこと露も心にかからず。真實極樂にまかりむかふ心のみにて臨終を侍ちぬ。なべての人の念佛しながら往生せず。さらば往生すとも。位上品にすすむことを得ざるは。此他力の信のうすく發らざるなり。ゆゑに摂運がごとく心つきぬ。さていかにとしても念佛者の亀鑑なるべし。うたがふ人心をとどめてよむべし○まさかくあり。本願のたのもしきを知つも。なほされとぞつりてそでもなくうちまかせえざるは。此ごろの人のくせなる侍る。摂運が此時に此處にいたりていたふそし。實に此場ぞさまさまざまなるおもひもおこり。あらはきぐべきことしふしぞ。されども平生にたのもしくて侍りぬ。此ころはくもあらずにいた。かりそめにもしらず拙語を加へらるべしとなん。その夜父母にむかひ。われもそろに養育の恩と

謝し。うれしく念佛勇進をとをしめて。同生淨土の契を約し。翌日家内をあつめて。各詠訣して十念を唱ふ。されて淨土の珍菓を食して後は。此世の穢食一向咽にくだらずとて。念念往生をいそぎつつ待遠や。かなたの足のはこびの命かぎりふ西をさしてもうらやむ身のうへをよ。かく御迎の遅きにも。侍奉る心のおもひうたがひなくて。聲とそありし念佛しけり。すべて此四五日がほど。寝食をたちたれども。少しもはうけしきなかりけり。廿六日涌く

ころ白湯をのむこと。たびたび。十二三杯みもあり。
ころころん。腹けなる音々ゝうどきこえて。呑終ぬれば。
こちらへ。いさだれ。是ゆゑ腹中ふりつるもろ〳〵けが不
淨と洗ひなづせり。外は人々心ゆきもせず洗ひなほす
こと。ぺさもうく念佛しるが。二便の汰みも
及ばず。八時頃なれど氣力おろ〳〵こえて。少し
起しくべくいとまもなく。父母背に手をあてゝ。ふ
うばおこしなりど。俄にうひの氣えんーうべ。父い
ちうも臨終の近付めるにしたがひて。ぺうふ栖蓮

往生の時いたりて。聲をあらべ。ちからある手
をあつまりそめ。合掌又手をくみ胸ふあく。六字を
三遍ゆきうくそなるが。つとなくの念佛能所
ゝと俗にいふ念佛ゝいふ ふなりうべ。父母ちびうふるとうちく。
ちうふ念佛をとること一時ばかり。此間ふ永正まへ
かくと告ちうふ。嚴誉上人ちうきうう十念を授
らうと。栖蓮分明ふうくうちて六十遍。上人まに
ゑうられなるべ。栖蓮目をひらき。御十念をうけて。
ちうる身にうけがたし。ちづふちづけるべくいとまれど

此ところの僧ふまれ。俗にたまへん。臨終の知識とすべし。人々心得さ。病人の息ざるをはりをいふも静ふ十念と授くべし。無上功徳の念佛なり。是とそ方法。機ふ應ずるとき。中々臨終のさわりとなん。なほく用心すべし。事ふこそそのまゝ静に授らるべ。三十遍ふれるべ。息えとり。父母そばふりなべ。くくもそでなるべと。上人愁傷の詞とのべられみ。疑べ合掌の手とげつ面とそれ。誠に息いとなべ。中指ふけ二つ輪の數珠ちゃち大指と頭指ふつまして。餘の三指竪ひべと。脣とたげるべ。そのまゝ上品来迎の印相なり。顔色雪



のべ。半眼微笑して。頭髪巻く螺髪のべ。全く佛面に似べりそれど。父母親族生佛ふ逢ひ奉る心地べ。そばいものもべ。頭とべう拜べひる。時寛延二巳年。八月廿六日行年廿一歳なり。此日曇天なれが七時頃より。西のべ晴べ。紫雲ひしくそびべ。べ雑色金光とべいろどるべ。隣浦の人々奇異の思ひとべ濱邊にいでべ驚歎べる。翌二十七日七ツ時。永正寺の墓山ふおべ火葬べる。此日午の時べり。

一天晴れて西の空に一しきれ紫雲ありけるが
ほのぼの寺の山なみにたなびき茶毘の煙り
ふたちゃじるやうに西へ流れ雑色の雲くれぐ
天華ふるやうに。皆々拜ミ奉り。黒江村。日方浦
へうつり。用ゐて。我先ミたるところふのぐりてこれば。
紫雲海波にうつり。水面長天にふ紫色なりなり。
此奇雲栖蓮初七日の頃よりでそびきけるがそのち
はるばるなりみて。衆人皆〻秋日氣晴て落輝暮
雲ふ映ずるなり。紫色に似て光彩あること



いとゝもかゝる紫光の濃雲金光をばなんなり。是
ゆゑて近隣近郷念佛しるゝ疑心あるもの。頻に増
信し。日課と勇進しあるい一向不信の輩ふら
ち信と生じ。本願に帰入し。念佛するもの多
りしなん。

右は澄月上人筆記し。かは橋本氏の家に
残りる。本書四十八紙。病中前後の事狀。つゞ
ふのべ。希有章十科とて讃歎する。其ゑり
にく。抑栖蓮無量生死の間ゑゞ善本や

植に人身をうけ。逢がたき如來の教
法ふかひたてまつり。就中一切世間難信の妙
行に帰し。一たび本願を信じたてまつり。稱名なが
ら口ふ絶ぜしむ。終にまさに来迎引接の悲願を
ひらかんとす。彼の雲にのりて佛と見えたまへり。安執
しつべしとぞ。満月は尊影にむかひ念佛
誠に命終前後の瑞應にあづかるべしとぞ。訪ひる人々。愁傷の
ことばをかけ



たまへり。隨喜とのべ。又母既に專修淨業の徒な
り。ゆゑにうつくしの涙とぞ。隨喜の袂にうつ
ばんまれ露。すでの雫とぞ。先ぶつの。終ふ皆
無常の風にちりぬる身とぞ。一旦の別離い
なぐ又母とぞ。ちぶの良縁なり。是真の孝養
なるべし。そもそも念佛の一門は。先明吉水の宗
に盛なり。ぞ課佛數遍とぞ。是則常念我
名とぞ。栖蓮がぞ。念佛
相續ぞ上品往生の本懷とぞ。得さ

て。乃至今親族が家に此記とどむ。向來これと
うん人。疑心をもつて思量をもつてかれと書をもつ
て。これ本書を撮要して。ふたつをもつて此栖
蓮の往生傳として。發心念佛をもつて志多し
てうん。實に女人往生の現驗。念佛行者の龜
鏡なり。しむ人容易の看をなすべからざれ。

華屋辨榮童子

童子俗名善次郎。海士の郡加茂谷。小松原村の
郷士。中尾善兵衛が子なり。いとけなく宿世のむくい

うや。嬰児の折うう。双眼ふいうしうしうばつて朦篭と
して光陰を送りき。きれどまつて乗急の因縁やあり
きん。七八歳の頃より頗る道心ふかく在俗をき
らい。薙髪染衣をもとめこいねがひ。失明の身な
れども。僧業成ぜんがためとて。又母これを許さざりうば。
ちうちうに常に近きほとりの往生院に遊ひて。時
時の勤行毎に住僧の後にさうごひ誦経念佛を。
食時に我家へ帰りのこりて、その餘いとまを居
まり。寶暦七丑歳七月中旬。いさうう病おりさんど

氣色平日ふうとうにて。飲食を思ひ給ひ
念佛を。それ父母にいつく。来る廿日ゝ定往生
すべし。若此言違ひなばこれまぎれもなく皆虚妄な
らんとちかひを。折ふし國君の御喪中なり。重き御
慎みのことなれば。今命終ぬれば。葬式なども思ふ
まゝにはなりがたかるべしと。童子うちうなづき
て。何条ことわりをつゝ待つべきなりとかぶり極樂へ
まゐりなば。ひたすらふたゝびへふたゝびもとゝ
のしじなどいひるるが。終にその言葉に違ひず廿日

みなゝて一人の僕とまゐり。佛前に香燈を供ずるに
至心に念佛を。申の刻ばかり。我と起しまゐらせ
て。母なるもの抱き起しまゐらせんとて合掌して。眠
ごとく息絶ぬ。其年十有五歲なり。

但信法子

大譽但信は。海士郡布曳村の人なり。天性質朴
うてへつらはず。愚昧魯鈍なるに。又
類なし。晚年に同村阿弥陀寺濟譽和尚に隨ひ
て剃髮し。和耳山西岸寺にまゐり。堂宇とゝ勤る。

事ごゝろさす人物なれば。小僧新發意の好ふくもの
のみそなりける。燃燈燒香掃灑等の作務終日。
ぞのゝくゝうちくりの念佛し。朝暮の勤行
みな鉦うちたゝき。御樣。御歡迦樣。又樣母樣但
信房ゞ御回向申上ます。請ゝ給ゝいれ。知音
のもれなどの回向みな。權兵衛殿八兵衛どのをはじめて
法名をゞ覺ゆるこゝろにふかゝ安永二巳歳の春い
ちはの惱ひゝあり。寺僧寄あつまり。孫もどろふえあ
つれゝ。助音念佛ゝ居ゝる。二月三日の夕方。和尚



に十念とさづゝんといへゝ。寺主檀譽和尚いとゞ
病床にいり。十念とさづけとりて。術なきやうしとゝ。
かゝしもなくなりぬ。暫くゝ。今一度十念を
ほゝきゝゝ。和尚即ち授られる後。やはりゝ我と
起ゝるとゝ。起ていい術をうるべきぞ。其中に往生
をきいへば。但信房ゞ往生をゆる起ゝ。つるおこゝ
ゝやゆる。いゞゝゞゝ起んゞゝゝ。つゝ起あり西に
むゝ合掌ゝて。ちゞゝく念佛ゝけるゞ。其中に絶ふゝり
壽八十三歳。あゝ單直仰信愚鈍念佛往生最上

の機なり。くのごとの人なん。大誓但信名實相應
せり

## 專誓淨念禪門

禪門俗名市兵衛。和哥山湊の牛町ふ近江屋と
いふ材木の商人なり。性温柔にして。いとど曾
て人と諍ひ瞋ることなし。はるばる所々の寺院に
詣で。淨土の要法をきて。篤信ふ念佛をなす時
西要寺ふて。傳法結緣の相承あり。ふの教誡ふ
や。感激したりなん。家に帰て後。萬般の家務。幼



稚の子息と。家族ぐもみうちまもせ。我身ハ一室ふ
獨處し。塵緣と屏絶と。晝夜持佛ふむかひ。一向稱
名の外他事なし。人来りて出あひ招れもて
らず。親族の慶吊皆ものふあづけて。寺詣をも
なりぬ。ふれ徧笠とりて往来をもなりふれ聲う
ちあげて念佛し。人の耳を驚しむ。先亡の年忌ふ
ぐふい。夜ものとり起居て念佛をり安永二巳歳三
月ぬさをり病あり。十七日別家をる尼ものに。
やくしく合掌恭敬をもて平生ふ異なり。病か

まこと正念ぞうしたまへし。誰か侍るべきとて。禅門
我こそ知たれ。剃髪染衣ハ釈尊の御弟子なれば。我
臨終のこと知識なるべしとて。ひたすら念佛ゆゑ時う
つりかるが。合掌ゑんじて。往生の素懐と遂にけり。
ときハ七十九なり。

光明大師曰く。忽爾無常
苦来逼精神錯乱始驚忙萬事家産皆捨離専心
發願向西方と。ゆゑも無常の苦に逼られ。ゆゑに
驚き忙ぐとも甲斐なきぞ。ひたすら平生ゆゑやう
なる時より。遠く慮りて萬事とりけうら念

佛ぶきをやめると無始薫習のあらまし。家財田園
の執しつひ。恩愛妻子の著しつひ。人毎に捨りて一
生ひたすらぶくしつ。ひたすらきみ入る類のあるき
世なるべ。此禅門ひたすら猛省し。そなたとなて。そなた
うたとなる。捨世篭居二十有餘回。厭欣至切。願行
具足。重習熟利しく。正念に往生の素懐と遂ける
ときのくうらやまるべし。

蓮亂法師いはく。年来道心深くして。念佛怠さ
らぬ聖なりけり。相知たる人の對面ぜんとて。

ばし尋ね來たれば。大切に暇をとりたることあり
て。得逢ひもつかまつりて。第子あるべきなり。
その人帰りたるのちなれど本意をとげ帰しまるべ
指合はせも侍らんとそれ。遇難くして人身を得
たり。此度生死と離れて。極樂に生れんとなり。
是身ほろびて極まる宮なり。何ぞ是を過る
大事あらんとぞいひける。此ことあるふきびしく覚ゆ
い。我心の及ぶべきにあらず。経云今日宮此事明日
造彼事樂著不覧苦不覚死賊到。世中ある人

えんぶ後世と思はざるいなし。今日は此事をせ
ん。明日は彼事を営んとまどふ。無常の敵
は漸く近づきて。命を失はんと知らざりし。
今の浄念も此聖の事状に相合とぞ。
末代にいまだ人なしとぞ。人自已に反
照して。いかんと猛者なるべし。

妙天信女

信女俗名なり。日高郡。志賀の串村。孫兵衛とい
ふ妻なり。その性柔和にて。さらもいかりけぶ

[illegible]。慈悲心[illegible]。乞食非人とかれ[illegible]
物とも[illegible]飯の一粒も落し行とゝのへ。[illegible]勿体
なきとぞ[illegible]。[illegible]食しけり。邊土の
[illegible]。これ教ゝ人もなれ。宿習の開発[illegible]。信心[illegible]
く折ふれて。[illegible]世とのゝ[illegible]。[illegible]念佛
[illegible]。年親しき[illegible]の四人[illegible]。西國順礼しける
[illegible]。[illegible]貴き僧の一人馬[illegible]
來[illegible]。おまへと呼[illegible]。[illegible]と汝
にあるべき。怠[illegible]信ずべ[illegible]念



佛[illegible]。ふき厨子とゝびやりぶらりぶらり[illegible]
[illegible]。もゝき拜[illegible]ふ地藏菩薩の像なり。同行四人
の中に。[illegible]我にちつけ[illegible]。[illegible]と。
[illegible]身にあたり。見奉[illegible]の僧いとゝ行
過[illegible]。[illegible]て帰國の後。此像を本尊[illegible]。深く
珍敬しく教のごとく念佛三昧怠[illegible]。安永元
辰歳十月の初より病[illegible]。子どもと呼[illegible]
く。我此度必定極樂に生[illegible]。皆々[illegible]助
音[illegible]念佛[illegible]。十日の七ツ時過。合掌

の手ゐ。彼地藏菩薩と奉持し。高聲念佛數十遍わるがるく終をみをり。荼毘をふるの夕り地藏の尊形はぐく。そふおぐり散たるのつ粉をり。ゆの臭氣なたのくうい異香紛々をり。遺骨と拾ふる胸の間に舍利あり。その形ゐ念持の地藏尊に似り。座光持物をふ違こゐ。ゐ像骨に小粒衆色の舍利あり。光彩映徹ゐり。信女その性。慈悲心ゐ深く瞋毒なきを見る。この心と地藏ぐ哀愍給ひく出離生死の道ゐ引導しゐ。かく



弥陀本願の易行念佛をきゐ身とをり。滅後祥瑞をあらわして。往生の跡をあらわすゐ。かの途中ゐく逢奉ゐ僧い。恐くい大士の化現をうん。所有悲願起餘大士く聞ぐ。ゐくのうん。

按ぐゐ恵心僧都の妹。安養尼公。極樂往生を願ひく。初い明暮地藏の寶号をゐ一夜夢中に菩薩告ゐく曰。極樂に生をんとれぐ。唯彌陀の名號を稱をべしと。尼公これより念佛しく。遂に往生を。ゐく近世勢州白塚の人。法名西月

信士。地藏尊より極重惡人無他方便の四句の文を授うり。專修念佛し。好相感見し。往生すし。勢陽往生驗記みえたり。事跡。おなじ。別記のごし。地藏本願經み。稱佛名號品あり。それ中に臨終の人の為に。高聲に一佛名と念ずれい。五無間罪を消滅し。さそれ病人をして念ぜし。福を獲罪を滅そしてつりたしと。地藏菩薩の說なり。觀無量壽經の說に同し。又し南閻浮提衆



生。舉止動念こと業みあらしたるこそ。これ罪みたらしたるこそし。何況や情と恣にして殺害。竊盜。邪婬。妄語。百千の罪狀とやし。出離無緣の身なるこし。此經をもちてこれをすくはしきの衆生。極樂に生ぜんがためこれの時う生死を解脫せん。その極樂に生ずれい。他力本願の名号みをもちて何の易行の法なるこれこれ地藏菩薩。南閻浮提の衆生に因緣深重なるがゆえよ。世尊滅後の衆生を慇懃に付屬しまうりこの

滅後の衆生を度したまへり。本願名号にて
ものいはしむ。これ世尊大悲出世の本懐なれば
なり。しかるに佛。此菩薩殊に浄宗を護持し。
念佛を愛楽したまへり。近世。祐天。智鑑。用證。悉
徴。無能。雲洞。敬首。貞傳。關通。可楽。雲説。託龍。待
定。恵頓。等の諸善知識。みな地藏の化身。な
るべし。菩薩の加被力を蒙る等。事實。現証い
ちじるし。ことわざ地藏大士信仰の輩は。くわく選
擇本願念佛の要旨とす。一向専修の行者

しなるべし。今妙天に異僧地藏の像をあがめ
ず。念佛をすすめ安養尼公ふかくて
なるべし
地獄菩薩誓願弘誓願十方佛子皆亦然一念分身
徧六道隨機化度斷因縁願我生生得親近圓
繞聽法悟真門永拔無明生死業誓作弥陀浄
土人南無阿彌陀佛
利峯松貞法尼
法尼は海士の郡及澤村の人なり。心ざし正直柔

和ふ。類なき善人なりければ。村里の人。その好操を
ほめけり。晩年剃髪して松貞と号し。ひとすじに後
世の勤のみなり。家の園に檀を植置き。朝ゆふ
八枚とをがみ。佛前に奉る。長日或は二時或
は三時。佛前にうちうとましき。一心不乱に高聲念
佛をとなへ。數十年來。ちかふ懈怠なし。寶暦七丑歳
七月。へさう違例なりしかど異なる苦痛なく。同月
廿日の頃より。時々合掌して。嗚呼といひて念
佛を。看侍の人何ぞのおいとをぞ。松貞い



はく。向ふ方ぎりもなくひろく。廣大の靈地なり
と。莊嚴の結構いとぐきなり。金襴の幡。風ふひるがへ
るり。天蓋空にかゝり。卓袱美なり。池水青
黄赤白色々の蓮華今と盛りに咲ぐれたり。
ありがたやれ。結構なり。ふまりふ感喜と。後ふいけ
なの結構なるところへ我とはとゆくべしとて。看侍の
人とともに。五六日の間うつゝ餘言なく。左のごと
聖境現前の物語のみ。その餘は口稱怠なしべ。
廿七日の曉合掌の手は風指とのべ。アレ弥陀如来

観世音地蔵菩薩なり。うちうちに皆佛菩薩なり。うれうれのぐんたの三昧現前智慧とぐぐ得みもうぐぐ。戒定とりぐ得みもうぐぐ。ぐられ口稱念佛のぐ。本願難思の善巧。凡慮の及ところふぐぐで。吉水大師の御詠に「ぐぐぐ佛ぐ。やうれぐらと。はぐぐみぐぐ。浄土の荘厳ぐるぐられぐぐぐ。此法尼ぐの本懐と遂られぐるぐたふぐぐぐやうぐぐ。

則譽妙鮮法尼

法尼俗名蘭。汲澤村。藤原善兵衛の妻うて。先に出る松貞尼の娘ぐり。同氣相ぐもるれうひぐ。母ぐ同じぐぐの性廉直みうぐ。慈悲心ふうぐ。ぐづうる餘長あれど。人にぐのびぐぐられと貧ぐぐあふぐむ。ぐも一向專修の行。勤めぐぐ怠らど。行住坐卧。唇舌動きやむぐぐぐ。千遍ぐりまして合掌十念ぐ。ぐぐぐぐる時ぐ回向せぐれぐ。その餘念みうぐぐぐぐぐぐぐぐ。ぐぐ。ぐけあぐ十聲一聲のぐぐうもむうて。

たふ。老後に支善兵衛とまふ。安心の口受を
うけ。薙髪染衣の身となりて。やがて信行を勵
まり。法尼齢七十八天明二寅歳七月下旬病と
發る。有田郡石垣の庄大乗寺主麗阿上人へ法
尼の息ふりをくれぬ。やがて告ふ。ふたを来て看病せ
らる。八月二日法尼日頃馴染あつい人。身まりめる
ときて。ちくもうるし。こゝや往生されるこゝ。や
ぶ涙にむせび念佛しられ後。こゝ一佛浄土の
再會ふ心せうれ。聖來迎接とき記ゆる。同月十
日未の半剋の頃。我と起ちべしとつへ。長子善大夫
枝起せうべ。麗阿上人佛前の燈明とかげ。病人
に袈裟とのけしゆ。十念と授く後。同音に高聲念
佛ること二百遍ばかり。今御來迎ゆるべし。生
涯の念佛此時に為なり。心をしめて給ひて
勧められしふ。ちうづこゝ。やがて四五十遍とうと。
本尊やうとうるこゝ。やがとうづこ。こゝふ大
音聲ふて。ちくふとや。南無阿弥陀佛と三遍と
なくくるのまに息ゝとまり。

相譽好倫法尼　現譽道意禪門

法尼は海士郡。布臾邑の人なり。その性質直みなり。のりみち誑語せず。恭敬三寶の心ふかし。ふ沙彌新発意といへども。曾て瞋慢をもてふく。四衆の過非更に談説をもてせず。つのるところ願生浄土の志發つよく。専修念佛の行者となり。單信無二に勤なり。ある時當邑菩提所。阿彌陀ま みつより。寺主海譽上人みましをもて。そもそも我身今は八十有余みちぬ。ものうきこれ史宅とをもれ



ものうきこれ安樂の御国にまゐゆくべく。心せうれなむ。宿世の報ひに命の永きがうとてなれば。瀬桐の葉と砂糖は。喰合の毒みつ。即先ものの人けうしたべ。これぬん究竟れ。同じくは日とえらびくと思ひ。十月十四日の夜。人をもぞの品をもの。持佛に香燈を辨備し。臨終の用意欠ものうきなり置。ものの二品をもてふぐく。その佛前に居直て。鉦うちならし念佛し。今や息の絶るか。直み佛のむかへたるまつ待ものと。更にその

心地もをだやかなるべ。妻子どうふ。もしても命の終ら
げるへ。佛の我をうら忘もて迎へ給ふなるとぞ。
もくもくと思ひ侍るべ。そのやうけ愚なり
しいなども。捨身必定せるべ。厭欣至切の情察すべ
もて兩三年と經て身いとう違例なり。ちれど心地
平生に異なるべ。海譽上人ありてそばにあるべ。
好倫念持佛をく。ちうたに西壁ふうら向ひ念佛
し居ぬ。佛壇はいでそるとくべそりれ何某よ
讓ちうとてとつぐ。臨終ちうく



ちうも用意をくさみぞやまりしてやいとばいや我念
佛をれば。目前に小ぶ宮殿あるくれ。中み本尊おり
まれぬなるく佛壇ちりぬそぐれく便をりとそるくる。安
永五申歳六月十五日。八十七歳みく正念明了
み。念佛相續しく。往生の素懷を遂てをり。
好倫尼の兄同所久左衛門。戒名現譽道意禪門も念
佛の行者なり。明和九辰歳八月廿四日の夕。病
床とまるく来迎の尊像とりけしぬ。家内に告く。
往生は後りでなり。皆々食事をぐとつく。折ぬ海

誉上人訪らひ給ひ誠に一生の大晦日ゝ来る
待て。十念を拝受し。その夜目出度往生せり。

心月道意信士

信士。俗名小山善太郎。室の郡下三栖村の濃
なり。宿世に植種やありけん。若き頃より深く佛
陀に帰依し。他の教とは爾らず念佛
の修行者なり。ある時熊野街道鹽見嶺を通る
ゝ。こゞにて俄に狂ひ出でゝ走るを。人
おりて是やゝうち驚き。目覚まれば僧一人

おりゝ。汝にこゞるあり。浜阪の下に行き取
帰るべしとのたまふ。何事ならんと半町ばか
下りゝれば。ある所に十一面観世音の像あり。
僧のゝたまひけるは是なるぞ持帰れとの。
ちなみに是より一際信心ふかくなりて。齢傾くまで
ゞひ念佛ゝ怠りなく。定まる數もなく。思ひ
出てはゝふさゝくり。時に寛保元酉歳八月
十七日彼岸中日。午の正中ふ。その子息とまるに。只今
往生を抱き起すべしと。正坐西面恭敬合掌し。家

内の者ども高聲念佛ゆゑに二三千遍俄爾に
しく往生りぬ。その時八十有三ばかり

妙薫信女

信女は鹽津浦清助といふ妻なり。俗名は。すい。
法名妙薫と号ず。曾て二女子を生でり。それより
女舟症と煩へり。藥治すれども功なし。此病うい
雖と喰しもれば。ゆゑ治ずして人あり。夫られとき
て。ゆゑやもたれとゆゑり。それを割てあるんといふ。さん
いくく。ゆゑうゆゑとのゆゑふ。生あるもの誰か命

と惜まざらん。我子の命がゆゑそ。他のをむ命
を害はしく極まる僻ゆゑり。必ずあたまひとと
制もれども。夫強くあるべしといへど。ちがう物の命
とるが心うべ。我子と害はるゆゑ。藥用の労もな
らじと。かくなる庖丁をとりて。指つけられど。夫
も其慈心に感じて止にり。かくてそれ女子絶に
身ゆりれば。浮世のうがたなく。別離のうれきみ
みひとぶれうしと。隣家の本性法尼傳中巻にあ
るふるしく。追善利益のため。念佛往生のゆゑで

うちをぐらうちれば。さん。生得正直なるものなれば。さに信じ。是より念佛怠りしば。年經る後。病に臥ふ。ふづら必死とす。一女子を他にあづけやり。萬事をすてて念佛を。本性つるみつりて病とよる。傍つて念佛をれば。心地やすく。怠りた病苦あつしとて。正命終みん。佛前に香燈とりけり。ふづら坐禮三ばしば。念佛數十遍。安然として坐脫す。ときに二十七。寛政八辰歳二月十一日の朝なり。



そもそも凡情因果の理にくらく。藥餌に用ひさるをりぐ口腹の欲と恣にして奥鳥の肉と食しくらく。これその生々の父母。世々の兄弟なることをしらば。たゞ殺害しく。今生の福力と損じ。來世の苦果とよるべく。實にかうしむべし。奇なるかな效董愛網にとられどく。慈物の情をもつく。意と穢土ふそびして。往生の思ひつりく切なり。この身に稱名して坐脫せるる何ぞ鄙の賤女とおもはん。經に曰。

坐脫するもの菩薩みなこれ有志まことふう

南紀念佛往生傳卷之一終



新刻此南紀往生傳上卷喜捨助刻存歿名署

華頂山故大僧正仰譽聖道大和尚爲正法久住普利羣生

飯沼弘經寺賜紫薫譽在禪大和尚奉薦明譽潭光上人

西岸閑居任阿上人謹捐衣貲若干爲是基本　西岸見住宣譽

上人隨喜輔助共擬　湛譽上人寒大和尚檀譽林敎上人濟

譽完道上人之增崇品位　荐在譽圓隣法子輪智禪門妙全

法尼淨遠信士妙演信女惠曉禪尼等之增道　麗門上人海

譽上人察譽上人鑑譽上人說譽上人眞英上人玄空上人等

各棄資標隨喜　松岳院智善大德報明譽潭光上人之慈恩

東都本庄田向院主隨阿上人薦濟譽完道上人之莊嚴　京

見性寺瞻譽上人爲體量院性譽淨眞居士眞壽院實譽妙空

大姉　京正覺寺香譽上人薦剏度師　塵譽卽厭上人十三

回　華頂信重院了成師道芽增長　冀現在康存者淨業速

滿過去逝靈者願行圓成及以沙界速登覺岸

享和二壬戌七月佛歡喜日　紀城西岸寺衆等謹識